

鴻 koh

月刊俳句誌

令和4年5月1日発行
(毎月1回1日発行)
第17巻第5号 通巻191号

5 月号

2022



蓬生の里の風音雨の音

蝶よ蝶よひとりの刻をゆるやかに

梅二月筆圧強き師の色紙

奉納の能の鼓のあたたかし

迦陵頻伽の声かも東風の山寺に

濃山吹瀬音明るくしてゐたり

亀鳴くやランプシェードの和紙の襞

晩翠の書を揚額に雛の家

万華鏡弥生の昼を深めけり

雛壇の雛にやさしき黙のあり

淋しかる春のみみづく鳴く夜は

蜩桶ぷつぷつどつと夜がくる

考へて考へて野火放ちけり

迦陵頻伽

主宰作品

増成栗人

菠稜草

副主宰作品

谷口摩耶

取り敢へず菠稜草をさつと茹で

春の宵五目ごはんの炊き上がる

川沿ひの河津桜の影うすき

撒く水のぎりぎり届く黄水仙

蒲公英へ身をかかめたる風の中

みちのくに余震のつづく彼岸かな

養花天サラダの多きお弁当

すみれ草見晴らしの良き茶室跡

花影の澁澤像のつつましき

ひんやりと風渡る日の花の山

四月はじめに王子の飛鳥山へ行つて来ました。江戸時代に、庶民のために染井吉野が植えられて、みんなで花見を楽しんだ山だと聞いています。ちょうど桜が満開で、大勢の花見客で賑わっていました。昨年の大河ドラマで身近になった澁澤榮一が飛鳥山の奥の方に屋敷を構えて、亡くなるまで住んでいた所なので、資料館や銅像などがあります。樹木もみな大木で、いかにも澁澤が愛したであろう、閑静な高台です。

俳 作品抄

同人選

青葉城跡かりがねの帰るころ 佐藤あさ子
凍蝶の夢は青空飛ぶ夢か 山岸明子
宿墨の筆を遊ばせ良寛忌 伊藤隆
久女忌のぴしぴしと踏む霜柱 山内宏子
春隣ひとつ余計に買ふ和菓子 石垣真理子
髪ばさと切り春節の中華街 鈴木崇
たまさかの書肆にひととき春雨 横山光榮
蜆汁自分らしさの自分とは 祐森司
春愁の手首に残る輪ゴム跡 青木まゆ美
大福茶たぶたぶと注ぐ相馬焼 鈴木隆一郎
尺を越す棒鱈を干す蚕の小屋 山崎正子

増成栗人 選

会員選

雪催仏足石の草書文字 井上つぐみ
菜の花のおひたしにある母の色 伊藤真代
爪ほどの稚魚が二月の潮溜り 藤原明美
二上山の雨が霽となりけり 松田那羅生
北風吹けば米を研ぐ手が早くなり 中川幸恵
花風水廁に飾る黄水仙 北城美佐
カフェラテのミルク熱つ熱つ寒の明 山田世都子
猫脚の椅子のまるさや春の夕 山田ゆきこ
春の雲白い絵具のぼたぼたと 野村昌代

谷口摩耶 選

「芹」はセリ科の多年草。春の七草の一つで溝や田の畦に生え古くは根白草、つまみし草と呼ばれ、白く柔らかな茎と葉は特有の香りがあり摘んで食用にする。七種粥にも欠かせない素材である。

せり合うつ、せり出す、せり上げるなどの言葉と同じように摘んだあとから勢いよく生えてくるので「せり」と名付けられたという。

芹の水たうたうと嶺走りたり 吉田鴻司



特集



俳句に詠まれた芹

荒井一代

「芹」は人里から山奥まで、水田や湿地谷間などに群生するセリ科の多年草。春の季語である。どじょう

我事と鯰のにげし根芹哉 内藤丈草
子に跳べて母には跳べぬ芹の水 森田 峠

水温むころ、芹の一叢に鯰を追う少年の濡れた白い膝小僧がどこか懐しく思う光景である。今なら芹と解るが、郷里の家の前の沢にも生えていたなど子供の時は気付きもせずに遊んでいた記憶と重なる。

芹の水たうたうと嶺走りたり 吉田鴻司
ふうはりと陽炎の立つ芹の川 増成栗人
一筋の神の流れに芹育つ 倉田紘文
芹あをあをと湧水はこんこんと 小澤 元
草庵へ芹の小流れありにけり 堀 文子
水芹に水の明るさありにけり 河合公八郎
まだ寒い内から群生し、互いに競り合うように伸びるのが「芹」の名の由来とも。春の息吹に尽きない水の流れは穏やかで明るい。作者の目線近くを味わいたいと並べてみた。

西行忌ゆきつつ芹を摘むことも 森 澄雄
芹摘みに借りたきものよ鴻の嘴 道彦
継橋知れず野芹を摘んで戻りけり 正岡子規

ふりむけば鳥語明るし野芹つむ 角川源義
芹摘みし籠のかたちを忘れたる 中村汀女
『古今集』に光孝天皇のへきみがため春の野にいでてわかなつむわが衣手に雪は降りつゝが採られて以来、俳句「芹摘む」は思ふ心を相手に届けようと叶わぬ苦勞をする意とあった。

芹の花ばかりを飛んで沼の蝶 細見綾子
寒芹の高なき束を葦結び 小林篤子
「芹の花」は夏の季語。十一月から一月に採れるのを冬芹、寒芹と呼び冬の季語となる。

厨さむし指にのこれる芹の香も 木下夕爾
はればれと焼野の匂ふ芹小鉢 野澤節子
唇を芹雑炊が焦しけり 前田普羅
鴨鍋の近江の芹よ白葱よ 大橋敦子
芹の香の朝粥で足り京泊り 能村登四郎
我が摘みし芹が香に立つ七日粥 小松崎爽青
芹は切った切り口から香りが立つ。お浸し和え物吸い物に、炒めても芹ご飯にしても良く、牡蠣鍋やとり鍋、仙台の芹鍋と様々に食される。

そして、人日の節句の朝、七草粥を食べ無病息災を願う、古くから続く風習は言うまでもない。芹・薺・御形・繁縷・仏の座・菘・蘿蔔と春の七草を諳んじみた。七種のはじめは芹ぞめでたけれ 高野素十

村中の瀬音ゆかしき芹の水

伊藤景泉
山崎正子

平成三年四月上梓の句集『河原』の最上川の章の作品です。山々が早春のやわらかな白差の中、いっせいに木々の芽吹き輝きが、産毛のようにつや桃色に山々を包む。

みちのくの雪山の雪が山肌を濡らし、山裾に拡がるとくさんの芹田を湧き水となって、潤す。春の七草の一つに数えられる芹は、野菜として栽培されている。芹は田の湧き水によって香り良く色良く、三十センチ、五十センチ、と生長し、みちのくのお正月の食材には欠かせない。

腰まで漬かりながら芹摘む人を守るのも、満々と音をたてて流れる、暖ったかい芹の水。「瀬音ゆかしき」の「せ」や「く」のような撞辞が村中を包み、そのおもしろさに共感した。

芹の一句

「せり」——特集

「芹」を詠んだ自分の俳句、または「芹」が詠まれた愛誦の句と、その句についてのエピソードや、俳句のなかでの「芹」について語っていただきました。

一筋の神の流れに芹育つ

倉鼠文
良知悦郎

清い流れの中で青々と芹が育っているのが見える。この句のキーは「神の流れ」と考える。芹の句は水、流れ、濯、洗う等を使っただ句が多いが掲句は「神の流れ」を使って芹が神聖な流れで育っていることを読者に語りかけている。芹が雑草でなく一種の神秘性を帯びているかに想像させる。

上五の「一筋」はこの流れが稀有の神のものであることを強く印象付ける。澄んだ水と青々とした芹が目に見え、食すれば匂いもよく特別な風味があると思わせる。芹は春の七草で田の畦や水のきれいな流れでよく見かける。粥などには欠かせない春の香菜の一つでもある。富士山麓の富士吉田市の山手には湧水をふんだんに使った芹田があり、青々と育った食べ頃の芹を見ることがある。

作者も神聖な神の流れの中の芹に感動されたのでしょ。

芹摘むに風よりびよーんかがまりて

柳澤子
青木未ゆ美

この句をみつけて、ふと思いついたことがある。私がまだ小学

清浄な水、嶺の威容への畏敬、この句ほどのよつな心で詠まれたものでしょうか、私はたくさんのお聞きしたかったです。教えていただきました。

写真の鴻司先生は頬笑まれています。

「瀧に、主宰に真つ直ぐか」とのお産が聞てきたよつな二月の雪の口でした。

滔々と富士の伏流芹洗ふ

荒川碧津子
畑田久美子

水が止まることなく流れる、その水が富士山からの伏流水であるという、清らかな流れの中で芹を洗っている。冷たい澄んだ水がざらざらとした光も感じられる光景が目に見え。

この句は現代俳句協会の現代俳句データベースの中、芹の部で目に止った一句。雄大な自然の中で春の息吹をまっ先に感じる句である。芹の姿、香り、思はず手を差し伸べてしまわずにはいられない、都会育ちの私が初めて芹摘みしたのは、四十数年前に松戸の千駄堀くまた二十世紀の森公園の造成が始まる前である。小流れの中、足元を濡らして摘んだ記憶が鮮明にあり、今、又所沢では毎年のように芹摘みは早春の楽しみのひとつになっている。もう一句、データベースの中に体験として実感できる句。

眺めるかも知れぬ川幅芹を摘む 木村ゆま

掲句の「風よりひ〜〜〜」という表現に惹きつけられた。その言葉でしっかりと情景が浮かんでくるのだが、作者に吹く風はどんな風だったのだろうか。それは、やわらかいその風のよつなものではなく、様々なことから身を守りついに、ひたむきに芹を摘んでいったのではないだろうか。そしてそれは、あの日の母の姿に重なってみえてくるのだ。

芹の水たうたうと嶺走りたり

高田鴻司
北村操

鴻司先生は今、先生の居らっしゃる除行地の景色はどのよつな物や色があるのでしょうか。句集の発行を計画されているのでしょうか。思えば「吉田鴻司」といっつお名前は今も耳にしておりますが、入会した結社「瀧」と深い関りのある俳人だとは思いますが、ありませんでした。そこで『高田鴻司全句集』『脚註句集』シリーズ田鴻司句集』を読み返し、先生のことを少しも知らずしてしまいました。主宰はじめ縁のあった方々の文章を読

むと慈父のよつな鴻司師像が胸に迫って来ました。瑞々しい緑と

「浦賀・ペリーだけの町じゃない」鈴木 崇



京浜急行本線の終点・浦賀駅で下車し、丘の上のホームに降り立つ。改札を出て階段を降りると目の前に造船所跡地・浦賀ドックが見渡せる。

航海練習船・日本丸や青函連絡船、護衛艦などがこの造船所で建造された。巨大クレーンやレンガ造りのドライドックは貴重な産業遺産といえる。二〇〇三年に閉鎖されてから現在まで立ち入り禁止であったが、整備が進み、昨年十月から今年一月までの期間限定で一般公開された。貴重な機会に足を運んだ。時が止まったままの廃墟感が漂う独特の空間は他では味わえないものだった。

ドック在りし日は作業員で賑わったそうだが、現在は静かな終点駅。浦賀の町はドックのある港を挟んで東西に広がる。まずは西側に向かって歩いていく。海沿いをしばらく歩くと、西叶神社の鳥居が見えてくる。

社殿は精巧な彫刻で飾られている。また、社務所入り口には立派な鍍絵がある。鍍絵は他にも周辺の建物に数点残る。干鯛問屋と廻船問屋で栄えた往時の浦賀が偲ばれる遺物だ。

西叶神社は、東側にも東叶神社がある。浦賀の東西は渡し船で結ばれており、現在も現役の市民の足である。航路は全国でも珍しい水上の市道なのだ。

東叶神社には勝海舟が水垢離をしたという井戸がある。近くには吉田松陰や桂小五郎らが宿泊した徳田屋跡があり、幕末の志士の動向が感じられる。

史跡とは関係ないが、東浦賀には我が鈴木家の菩提寺もあり、私としては大変馴染みのある場所だ。

さて、浦賀といえばペリーの来航である。黒船が浦賀沖に入港した際、敏腕を振るったのが浦賀奉行所の与力・中島三郎助であった。彼は使節団との最初の折衝にあ

たり、翌年には日本初の洋式軍艦・鳳凰丸の建造に尽力した。勝海舟とは長崎海軍伝習所の同窓であり、桂小五郎は中島に造船学を学んだ。

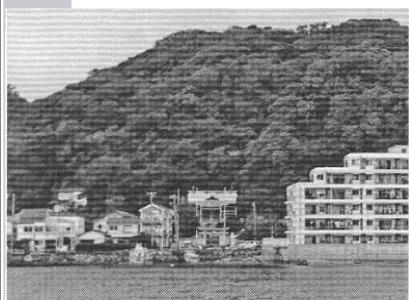
中島三郎助には俳諧師の一面もあり、「木鶏」と号した。「浦賀の俳諧宗匠」として江戸まで名が知られていたという。

ともし火のゆれるほど湧く清水かな
水除はことに色よきもみぢかな 本鶏

江戸期の句であるが、なかなかどうして瑞々しい感覚の句である。

中島三郎助と俳句の関係については、俳句アトラス・林誠司さんのブログ「俳句オデッセイ」で知った。誠司さんも横須賀在住の方である。

浦賀で俳句的つながりを見出せるとは思っていなかったの、うれしい驚きだ。



浦賀・西側から見る東叶神社

羽音集

選 摩耶 谷口



北風吹けば米を研ぐ手が早くなり

会津 中川幸恵

かたかたと窓を鳴らして雪女郎

煮凝りにつまんだ証の穴のあり

春炬燵反省文を書く子かな

オリオンが真上に塾の終はりけり

斑雪赤きサイロの並びをり

冴返る鈍く輝く銀食器

花風水厠に飾る黄水仙

春風や保育園へとペダル踏む

校庭にタイムカプセル卒業す

青空の浮き雲ひとつ冬木の芽

カフェラテのミルク熱つ熱つ寒の明

立春や野菜サラダを大盛りに

風花や少し嗜む赤ワイン

日脚伸び枯山水の石の影

土匂ふ素焼きの壺のあたたかし

春の水ネイルカラーは小指から

勝ち負けは些細なことよ桜餅

猫脚の椅子のまるさや春の夕

春の月不足の二円切手貼る

豊橋 山田世都子

札幌 北城美佐

小樽 山田ゆきこ

燕庵閑話

虫丸



俳句をつくるとき
どんな季語
をつけるか
いつも
悩みます

季語の幹旋
の基本や
早く上手に
なる方法は
ないので
しょうか

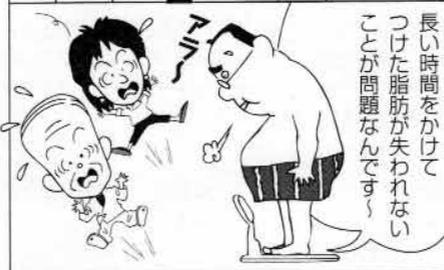


つけ方の
基本は
当然ある
けれど
季語は頭で
理解してと
いうよりは
実際の場で
体で感じて句を作り
続ける中で
自然に身に
つくもの
ものだろうね



つけ焼き刃の
知識は脆いが
時間をかけて
なかば
身体感覚と
して身に
ついたものは
失うことは
ないからね

ナルホド
でも
ボクの
場合は



長い時間をかけて
つけた脂肪が失われない
ことが問題なんです

<http://www.haisi.com/koh/index.htm>